

乳幼児との情動調律による感受性訓練の効果

——心理療法家を目指す大学院生を対象に——

葛西 真記子*, 中津 郁子*, 末内 佳代**,
久米 禎子*, 栗飯原 良造*, 山下一 夫*,
塩路 晶子***

(キーワード: 感受性, 情動調律, 乳幼児, 訓練)

I 研究の背景

社会や生活環境がめまぐるしく変化していく中で、人々の心の病への関心や心理療法への期待が高まってきている。そして社会が発展するにつれ、人々はますます強いストレスを受け、この傾向はさらに続くと考えられる。このため、心の問題を専門に扱う臨床心理学が重要になってきた。臨床心理学が社会から担っている命題は、「有能な臨床心理士を如何に育成し、その専門性を保障するか」にある。平成8年以降より試みられてきた臨床心理士養成に関する指定大学院の創設はその要請にこたえるものであった。平成18年度現在、136校の大学院修士課程で臨床心理士を養成しており、平成16年には高度専門職業人を養成する指定大学院が発足された。臨床心理学が社会の中で専門家として機能するためには、有効な実践活動を提供できることを社会に示していく必要がある(下山, 2003)。この流れの中で有効な実践活動が提供できる、実証に基づいた(Evidence-based)臨床活動ができる臨床心理士を如何に訓練するかについて様々な試みがなされてきた。平成2年より心理療法家の訓練に関して学会が中心となり議論がなされ、①心理臨床・カウンセリングに関すること、②コミュニティ活動に関すること、③心理アセスメントに関することの3分野の訓練が必要であることが指摘されてきた(鏑, 1998)。その中で特に、心理臨床・カウンセリングに関することが基礎となり、その知識や技法を訓練するだけでなく、心理療法家自身の感受性や想像力、自己内省力といった能力を訓練することが重要であると考えられる。これは、筆者がこれまで行ってきたカウンセラーの効果的な訓練方法の開発の成果の中から明らかとなったことである(葛西, 2005, 2006)。心理療法家としての成長が心理療法やカウンセリングの知識や技法の向上には不可欠なのである。そこで本研究では心理療法家の自己の資質の一つである感受性を育むための有効な教育訓練プログラムを開発することを目的として行った。

感受性とは広辞苑(第5版, 2004)によると「外界の印象を受け入れる能力。物を感じとる力。感性」である。三好(1999)は、感受性について「外界からの情報をキャッチするレセプターとしての働きの認知的側面と、それを受けたことにより何らかの影響をうけるという被影響性、もしくは反応性」とし、このような感受性は、クライアントから発せられる意識・無意識、言語・非言語をうけとる必要がある臨床心理士にとってなくてはならない感性である。東山(1986)も「人の心が分かるためには、自分の中に生じる“わからないもの”の中に、実は自分自身の存在の一部が隠れていることに気づかねばならない。(中略)共感するためには感受性が必要である」と心理療法を行う者の感受性の重要性を述べている。氏原(2002)もカウンセラーが自分の内的なプロセスに気づくことが重要であり、そのためにカウンセラーの感性を通じて、未分化な感覚レベルの衝動を感情レベルに引き上げて自我と結びつける必要性を指摘している。また山下(1994)は、「クライアントからの非言語レベルでの影響をうけるということこそ、感受性と」いえ、「それによって自分自身がどのように触発・喚起されたかを理解すること」の大切さを述べている。クライアントに共感し、内的理解をすすめるためには、カウンセラーが、クライアントから刺激を受けた自己の心の動きを自らの感受性を使って、理解する必要がある。そして、感受性と共感性を増すためには、膨大な知識の学習と感受性訓練が必要となる(東山, 1994)。浅川(1991)は、

*鳴門教育大学臨床心理士養成コース

**鳴門教育大学学校臨床実践コース

***鳴門教育大学幼年発達支援コース

共感性を高めるためには「人間の温かさ」に触れる体験を重視し、澤田ら（2001）は、「自らの感情生活を重視する態度」が共感性を高めるために必要であるとしている。また、葛西（1997）は、面接の場面で、クライアントの内的理解のためには、カウンセラーがクライアントの応答によって沸きあがる相似の感情を捉え、覚知することが必要で、それが共感につながるとしている。そして実証研究によって共感性と感情覚知の関連性を示した（葛西・万木, 2006）。これまで多くの臨床家が心理療法の基本として共感する能力をあげており（Rogers, 1957; Kohut, 1959）、クライアントの内的状態を体験し、それを把握するという共感性（Empathy：感情移入）が重要である。そして、クライアントの内的状態を受け取るためには、感受性がなくてはならないのである。

これまで感受性を育むためにロールプレイやワークショップ、グループ体験等の有効性が研究されてきた（Bourke&森平, 1992; 澤田, 1998）が、本研究ではこれらの訓練のために「乳幼児との情動調律」の体験が有効であると考えられる。ロンドンのタヴィストックでは、精神分析派の心理療法家の感受性訓練を目的として「乳幼児観察」が1946年から行われており、現在も続いている。これは観察者が家庭訪問をして、日常の家庭生活の中に入りこんで、母子の生活をそのまま観察するもので、出産直後2ヶ月から2歳までがその対象となる。観察した記録をもとに週1回セミナーグループで母子関係や赤ちゃんの心の世界について検討するものである。Convington（1991）は乳幼児観察の意義を①母子間で起こっていることを感じ取れ、かつ観察者の中で起こっていることをみられる適度な観察の距離感を育てる、②転移、逆転移の理解、③非言語コミュニケーションへの調律、④わかろうと考え続けるあり方を学ぶこと、⑤発達理論への異議申し立て、⑥人には自力で変化していく力があることが信じられるようになることをあげている。さらに山口（1999）は面接者が自身の感情を含めて、その場の情動を抱えていくこと（Contain: Bion, 1962）につながっていくと述べている。言葉を話すことのできない乳幼児とともにいることによって五感の感覚を使って主観的情緒的な体験を感じ取り、非言語的な意味を想像する。これは心理療法家の姿勢である「関与しながらの観察」（Sullivan, 1940）ともつながり、面接時に面接者に起こる感覚をできる限り意識化することによって、面接関係の理解となる。本研究ではこの「乳幼児観察」の有効性を踏まえた上で、さらに関与者からの積極的なかわりを含めた「乳幼児との情動調律」を心理療法家の訓練方法として考えた。情動調律とは、Stern（1985）によって提示された用語であり、生後7から9ヶ月に始まる主観的自己感の形成期に至って、初めて観察されるものであり、母子間での情動状態共用様式で、行動の背後にある感情や内的状態の共有を可能にするものである（丸田, 2002）。

本研究では、訓練生が乳幼児とのかかわりの中で子どもに寄り添いながら、子どもと心を重ね合わせ、訓練生の感覚を使って理解することが、心理療法家にとって必要な感受性の訓練方法として有効であると考えた。言語に頼りがちな傾聴から、全感覚を使って非言語コミュニケーションへの調律が可能になるのではないだろうか。乳幼児観察とは異なり、積極的に乳幼児にかかわっていくので、自分の感じたものが乳幼児が伝えようとしていたものと一致していたのか、不一致であったのか伝わり、また自己の内面で生じてくる様々な感情ともその場で向き合っていかななくてはならない。それにより、訓練生の中にある未解決の母子関係葛藤にも向き合っていかななくてはならなくなる。訓練生はときには乳幼児に同一化し、時には養育者に同一化し、それを通して自己の内省力がたかまり、これは逆転移理解につながる。心理療法の中で、セラピストが自身の未解決の問題から発生している無意識の情動である「狭義の逆転移」が起こることはクライアントにとって有害であって、有効ではない（Racker, 1968）。熟練した心理療法家であれば、逆転移への気づきを実際の事例の最中に起こり、これを言語化したりすることにより事例が効果的に進むことが明らかとなっている（遠藤, 2000）。また、その解決方法としてこれまで示されてきたのはセラピストの個人分析（教育分析）であった（山口, 1999）。しかし日本では個人分析を受けられる機会は少なく、セラピストが自身の問題に気づく方法が乏しいのが現状である。そこで本研究で取り組む「乳幼児との情動調律」によって自身の狭義の逆転移を自己内省し、意識化することによって、取り除くことが可能となり、逆転移の積極的な側面、広義の逆転移である「クライアントからの無意識のレベルでの交流がセラピストの意識にのぼった姿」として捉えることが可能となり、クライアント理解につながる。訓練生が乳幼児とのかかわりを振り返り、想像力を働かせ、自己内省する場として、週1回の小グループでのディスカッションを行った。これにより他のグループメンバーに自己内で起こった様々な情動体験を意識化し、言語化することが可能になる。タヴィストックで行われている乳幼児観察の実習（衣笠, 1994; 鈴木, 1994; 渡辺, 1994）や日本で行われている数少ない乳幼児観察の実習（山口, 1999）においても、観察後の観察者同士の小グループでのディスカッションが自らの体験を振り返る上で重要であることが示されており、そのディスカッションの場が実習生にとって集団スーパービジョン、集団療法やエンカウンターグループのような役割を果たす。

本研究の目的は、「乳幼児との情動調律」が心理療法家を目指す大学院生の感受性にどのように影響を与えるかを検討し、効果的な教育訓練プログラムを提示することとした。乳幼児とのかかわりを持つ実習において、大学院生が積極的に情動調律を行い、実習後の小グループでの討議において、自らの経験や思いを言語化することにより、感受性を育む。感受性の変容については、質問紙によってその効果を検証する。

II 方法

1. 対象と手続き

本研究の対象者は、臨床心理士養成指定大学院（1種）において臨床心理学の訓練を始めて1年目の学生60名（男性22名、女性38名）であった。平均年齢は、27.85歳、標準偏差8.65歳であった。そのうち保育所実習に参加した者が18名、していない者が42名であった。調査は、実習前（2007年4月）、実習後（2008年4月）に行った。それぞれの対象者を表1に示す。

表1 対象者の内訳（人数）

	事前調査	事後調査
実習参加（予定者）	20	18
不参加（予定者）	40	36
合計	60	54

保育所実習に関しては、大学院に入学後、対象者に対して、臨床心理士養成の訓練の一環として保育所実習があることを説明し、参加希望者を募った。その後、希望者に対して説明会、事前指導等を行った後、週1日、5ヶ月間継続しての保育所実習を前期と後期の2回に分けて行った。また、夏休みの期間に集中的に乳児クラスでの保育実習を行なった者もいた。事前指導の内容は、実習対象の保育園での実習方針、乳幼児の発達論、乳幼児の観察方法、情動調律などについてであった。

実習期間中は、実習参加者による小グループ（8人）でのディスカッションを行い、振り返りを行った。前期と後期の実習の参加者はそれぞれ別の院生であった。実習に参加した院生は、実習の直後に「思い出す限り多くのことについて、子どもの思い、自分の中に浮かんできた感情等も含めて」記録するように指導した。週1回のディスカッション時には、実習でのそれぞれの体験についてできるだけ詳細に筆記記録したものをもとに、自らの体験について討議した。ディスカッションの様子はビデオでも録画し、訓練生の変化について観察した。小グループでのディスカッションでは、実習生の観察記録の書き方の変容（乳幼児や自分自身の思いや感情についての言及の増加）、討議内容の変容（乳幼児の行動や気持ちへの気づきが増え、自らの感情へ視点が向くようになった）、幼児理解の深化、グループメンバー間での心理的支えの増加等が見られた。

2. 測定方法

本研究では、乳幼児とのかかわりを持つ実習において、積極的に情動調律を行い、その結果、感受性が高まるという仮説に基づいているので、保育所実習の事前・事後で、以下の3つの感受性に関する尺度を測定に用いた。
対人的感受性尺度 この尺度は、感受性の中でも対人的な感受性を測定するためのもので、Perceived Coding Ability Scale 短縮版（Zuckernam & Larrance, 1979）を益谷・佐藤（1989）が日本語に訳したものをもとに松岡・青柳（1998）が作成した24項目の質問紙である。松岡・青柳（1998）は対人的感受性を「対人場面において、相手の感情を非言語的に読み取る（解読）こと、読み取った相手の感情により心理的に影響される（被影響性）こと、自分の感情を非言語的に表現する（符号化）ことのしやすさ」と定義している。質問項目は、解読（8項目）・被影響性（8項目）・符号化（8項目）の3つの内容からなりたっている。松岡・青柳（1998）は、対人的感受性と幼少期の母親へのアタッチメントとの関連を調査し、その結果、回避型のアタッチメントを示した大学生は安定型やアンビバレント型の者より対人関係感受性が低いこと、因子別に見ると、アンビバレント型の者は、解読が低い、被影響性は高いということが明らかとなった。つまり、対人的感受性には、幼少期の母親との関係が影響することを示している。

対人関係過敏性尺度（Interpersonal Sensitivity Measure: IPSM）（Boyce & Parker, 1989）この尺度は、Boyce・Paker（1989）が、うつ病の研究から対人関係過敏性という人格スタイルがその発症に関連があることを示す研究の中で作成されたものである。彼らは、対人関係過敏性を「他者の行動や感情に対する必要以上に過剰な意識または感受性」と定義している。染矢・桑原他（1999）によって、この尺度の日本語版が作成された。この尺度は「対人意識」「賞賛欲求」「分離不安」「臆病さ」「脆弱な内的自己」の5因子36項目からなっている。染矢・桑原他（1999）やSato, Narita, et al.（2001）は、日本において対人関係過敏性尺度とうつ病傾向との関連性を示した。

ノンバーバル感受性尺度（和田, 1992）この尺度は、和田（1991）によって作成されたノンバーバルスキル尺度

の3つの下位尺度の一つであるノンバーバル感受性についての4項目からなっている。ノンバーバル感受性とは、「相手が何を伝えようとしているのか、もしくはどのような感情状態にいるのかを読み取る能力」と定義している。これは、自らが相手を理解しようと関与していく能動的な感受性である。

その他 対象者の属性を知るために、性別と年齢についての2項目と、保育所実習への参加・不参加、参加の場合は乳児クラス・幼児クラスの別についても質問した。以上の3尺度64項目と属性の3項目をあわせて質問紙とした。64項目については、「まったくあてはまらない(1)」から「とてもあてはまる(5)」の5件法で回答を求めた。

Ⅲ 結 果

1. 各尺度の分析

感受性に関する3つの尺度について、それぞれの項目の平均と標準偏差を算出した結果、極端な偏りはみられなかった。そこで、尺度ごとに主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行った。対人的感受性尺度は、因子分析の結果、共通性が低い項目および因子負荷量が0.3より低い項目が4項目あった。その4項目を削除した20項目で再度因子分析をした結果、固有値の減衰状況と解釈のしやすさから、3因子を抽出した（表2）。第1因子の8項目は、松岡・青柳（1998）の「符号化」因子と一致したので、「符号化」因子と命名した。固有値は、4.35、寄与率は21.73%であった。第2因子の5項目は、松岡・青柳（1998）の「被影響性」因子がマイナスに負荷した項目と否定的な被影響性の項目からなっていたので、「非影響性」と命名した。固有値は、2.97、寄与率は14.83%であった。第3因子7項目は、松岡・青柳（1998）の「解説」因子と一致していたので、「解説」因子と命名した。固有値は、2.45、寄与率は12.27%であった。3因子の累積寄与率は、48.82%であった。また、それぞれの因子の信頼性をクローンバック α の内定整合性から検討した結果、0.84, 0.79, 0.71と、ある程度の信頼性が確認できた。

対人関係過敏性尺度は、主因子法（バリマックス回転）による因子分析の結果、固有値の減衰状況と解釈のしやすさから4因子構造をなしていると考えた（表3）。因子負荷量が0.3以下の4項目は因子にふくまなかった。

表2 対人的感受性尺度の因子分析^a

	因 子		
	1	2	3
23. 私が誰かを嫌っているとき私の様子でそれが大体その相手にわかる。	.800	.108	-.072
18. 私が誰かを軽蔑しているとき私の様子でそれが大体その相手にわかる。	.759	.095	.020
22. 私が何か怒っているとき私の様子でそれがたいてい他の人にわかる。	.667	.055	-.040
19. 私が何かを悲しんでいるとき私の様子でそれがたいてい他の人にわかる。	.627	-.085	-.052
21. 私が何か楽しんでいるとき私の様子でそれがたいてい他の人にわかる。	.571	-.180	.328
20. 私が誰かに興味を抱いているとき私の様子でそれがたいていその相手にわかる。	.540	-.172	-.010
17. 私が誰かに好意を持っているとき私の様子でそれがたいていその相手にわかる。	.534	-.133	.149
24. 私が何かを喜んでいるとき私の様子でそれがたいてい他の人にわかる。	.529	-.244	.239
15. 人が私を嫌っていると分かっても私は何とも思わない。	.015	.847	.040
9. 人が私に好意を持っていると分かっても私は何とも思わない。	.070	.705	-.167
10. 人が私を軽蔑していると分かると私はそのことが気になる。	.134	-.704	-.030
14. 人が何かを怒っていても私の気分は害されない。	-.223	.545	.039
12. 人が私に興味を抱いている分かつと私はそのことを意識してしまう。	.058	-.516	.246
8. 人が何かを喜んでいるとき私はその人の様子でそれがたいていわかる。	.009	-.035	.734
5. 人が何かを楽しんでいるとき私はその人の様子でそれがたいていわかる。	.080	-.130	.588
1. 人が私に好意を持っているとき私はその人の様子でそれがたいていわかる。	.042	-.134	.563
4. 人が私に興味を抱いているとき私はその人の様子でそれがたいていわかる。	.164	-.038	.544
6. 人が何かを怒っているとき私はその人の様子でそれがたいていわかる。	-.107	.035	.402
3. 人がなにか悲しんでいるとき私はその人の様子でそれがたいていわかる。	-.033	-.081	.392
7. 人が私を嫌っているとき私はその人の様子でそれがたいていわかる。	.121	.139	.367

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a.

表3 対人関係過敏性尺度の因子分析^a

	因子			
	1	2	3	4
46. 他の人を非難するのではないかと心配する。	.683	-.026	.033	.143
26. 自分が他の人に及ぼす影響について気に病む。	.631	-.073	.022	.154
43. 自分の気持ちが他の人を困惑させるのではと恐れている。	.596	-.105	.203	.267
57. 他の人の気持ちを害するのではと心配している。	.587	.172	.326	.206
33. 他の人がどう感じているかをいつも意識している。	.574	.354	.035	.309
54. 他の人が私のことをどう思っているか気に病んでいる。	.501	.335	.331	.122
41. 人と別れるときには不安になる。	.479	.373	.098	-.073
36. 親しい人を失うのではないかと心配する。	.479	.114	.323	.027
52. 他人に動揺させられると、簡単に忘れることができない。	.466	.271	.115	.091
49. 批判されることを、いつも予測している。	.458	-.081	.276	.040
25. 人と別れると動揺する。	.450	.255	.060	-.039
34. 自分の言動について批判されているのではないかといつも気にしている。	.448	.352	.163	.342
40. 親しい人を楽しませるためには、突飛なこともする。	.287	.214	-.020	-.172
58. 他人が私に怒っていると、心が傷つく。	.330	.649	-.028	.141
47. 他人が自分のすることに批判的だと気分が悪い。	-.029	.600	-.066	-.145
30. 他人と親しい関係にあると安心する。	.135	.589	-.129	-.047
42. 人がほめてくれるとうれしい。	-.238	.586	-.224	-.124
60. 他人が私をどのように思っているか気にかけている。	.451	.513	.015	.053
32. 友達と喧嘩をした後は、仲直りするまで落ち着かない。	.226	.509	.028	.346
28. 知らない人と会うのは不安だ。	.013	.448	.327	.138
39. 他人がほめてくれないと、自分がよいことをしたと信じられない。	.030	.446	.164	.140
35. 人に相手にされないと、すぐにそれに気づく。	.241	.346	.125	.120
55. 知り合いがほめてくれないと、幸せな気分になれない。	.168	.230	.155	.220
29. 他人が本当の私を知ったら、私のことを好きにならないだろう。	.201	.076	.746	.161
48. 他人が本当の私を知ったら、私のことを低く見るだろう。	.252	.148	.597	.197
53. 他人は私を理解していないと感じる。	.208	-.243	.562	-.086
50. 他人が自分に満足してくれているかどうか、本当のところ確信できない。	.179	.194	.516	-.088
44. 他人を幸せな気分にするができる。	-.075	.044	-.468	-.126
37. だいたい人は私を好いていると感じている。	-.057	.038	-.410	.040
51. 自分の真の姿を知っている人は嫌いである。	-.002	.010	.311	.131
56. 誰にでも礼儀正しい。	-.052	.003	.076	.061
31. 相手を傷つけるのではと恐れて、腹をたてない。	.010	-.003	.048	.688
45. 他人に腹をたてることは、自分には難しい。	.086	-.212	.029	.684
27. 拒否されるのを恐れて、自分の考えを言うのを避ける。	.192	.165	.294	.490
38. 他人を怒らせたり煩わせるくらいなら、したくないことでも自分でする。	.205	.147	.043	.452
59. 私の人間としての価値は全く他人の評価によっている。	.189	.262	.164	.344

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

表4 ノンバーバル感受性尺度の因子分析^a

	因子
	1
62. 他人同士の会話のやり取りを見てその人たちの性格をいつも間違えることなく話すことができる。	.755
64. 初めて会った時でさえ、私はその人の性格特徴を正しく判断することができる。	.754
61. 私ほど敏感に人の何気ない行動の意味を理解できる人もいない。	.501
63. 誰でも私に本当の気持ちを隠すことは、ほとんど不可能である。	.333

因子抽出法：主因子法

表5 事前事後、参加不参加の分散分析

	実習参加群		実習不参加群		交互作用 F df=1/113	群 F df=1/113	時期 F df=1/113
	事前 N=20	事後 N=18	事前 N=40	事後 N=36			
対人的感受性尺度							
符号化	3.662	3.660	3.241	3.306	0.339	3.806 †	0.086
	0.626	0.690	0.643	0.672			
非影響性	2.070	1.700	2.107	1.989	1.394	1.065	4.188 *
	0.623	0.413	0.696	0.699			
解読	4.121	3.992	3.982	3.914	0.000	0.626	1.422
	0.425	0.261	0.433	0.394			
対人関係過敏性尺度							
対人不安・分離不安	3.730	3.883	3.698	3.811	0.495	0.015	2.440
	0.525	0.503	0.422	0.623			
対人は認	2.818	2.833	2.894	3.032	0.320	0.906	0.475
	0.661	0.528	0.626	0.560			
脆弱な内的自己	3.067	3.130	2.959	3.114	0.008	0.008	0.792
	0.581	0.675	0.736	0.695			
臆病さ	3.600	3.722	3.210	3.256	0.900	5.134 *	0.440
	0.681	0.599	0.748	0.724			
ノンバーバル感受性尺度	2.075	2.222	2.049	2.306	0.783	0.014	1.593
	0.698	0.542	0.681	0.638			

上段は平均値 下段は標準偏差 † $p < 0.10$, * $p < 0.05$

第1因子12項目は、元の尺度の「臆病さ」因子から3項目、「分離不安」因子から5項目、「対人意識」因子から4項目からなっていた。自分の他者への負の影響と他者から心理的に遠ざかることへの不安に関する項目が多かったため、「対人不安・分離不安」因子と命名した。固有値は、7.84、寄与率は、21.78%であった。第2因子9項目は、元の尺度の「是認要求」因子から5項目、「対人意識」因子から3項目、「分離不安」因子から1項目からなっていた。対人関係における是認意識に関する項目が多かったため、本研究では「対人は認」因子と命名した。固有値は、3.41、寄与率は、9.48%であった。第3因子6項目は、元の尺度の「脆弱な内的自己」因子から2項目、「分離不安」因子から2項目、「是認要求」因子から2項目からなっていた。「是認要求」からの2項目は負の負荷量をしていた。この因子は、「本当の自分を知ったら」嫌われる、低く見られる、わかってくれない、好いてくれないなどの項目が多かったため、「脆弱な内的自己」因子と命名した。固有値は、2.19、寄与率は、6.07%であった。第4因子5項目は、元の尺度の「臆病さ」因子から4項目、「脆弱な内的自己」因子から1項目からなっていたため、本研究でも「臆病さ」因子と命名した。固有値は、2.01、寄与率は、5.76%であった。4因子の累積寄与率は、43.09%であった。また、それぞれの因子の信頼性をクロンバック α の内的整合性から検討した結果、0.86、0.77、0.75、0.68と、ある程度の信頼性が確認できた。

ノンバーバル感受性尺度は、ノンバーバルスキル尺度の中の1つの下位尺度であったため、4項目で因子分析を行い、1因子構造であることを確認した(表4)。1因子の固有値は2.04で、寄与率は、50.9%であった。4項目の内的整合性(α)は、0.65であり、和田(1992)の結果より少し低い値であった。

2. 実習の効果分析

乳幼児とのかかわりを保育所実習の事前・事後において、参加者と不参加者で感受性に違いはあるのかということ調べるために、3つの感受性の尺度のそれぞれの下位尺度の平均点を算出し、 2×2 の分散分析を行った(表5)。対人的感受性尺度の「符号化」因子では、群と時期の交互作用は有意ではなかったが、参加・不参加で有意傾向の差が見られた($F=3.81, p < 0.10$)。事前・事後には差はみられなかった。「非影響性」因子では、交互作用、参加・不参加では有意な差は見られなかったが、事前・事後において有意な差が見られた($F=4.19, p < 0.05$)。項目別にみると、「人が私を軽蔑していると分かると、私はそのことが気になる」「人が私に興味を

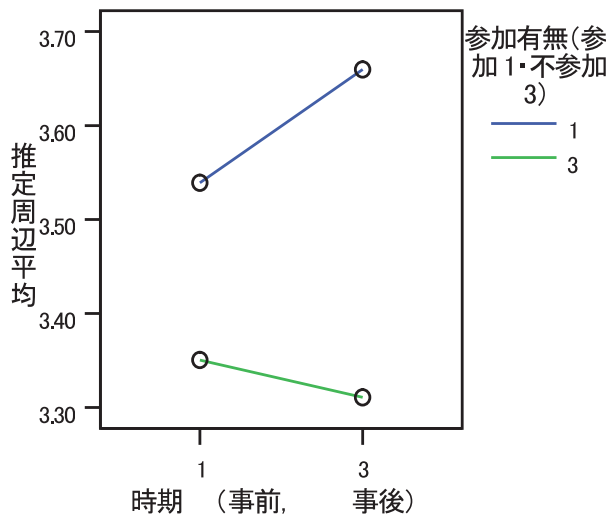


図1 対人的感受性尺度 符号化因子平均

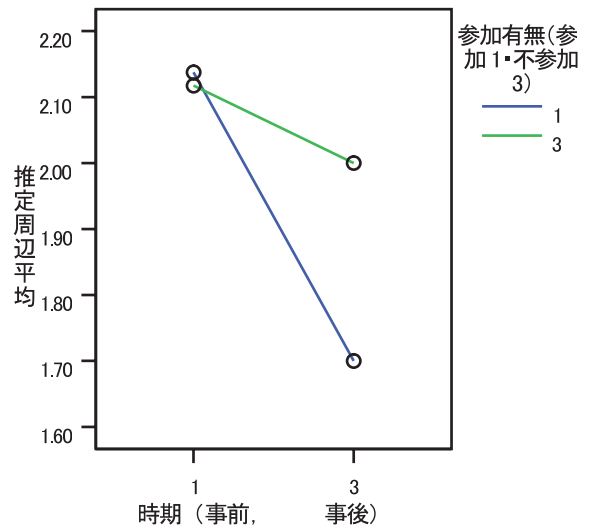


図2 対人感受性尺度 非影響性因子平均

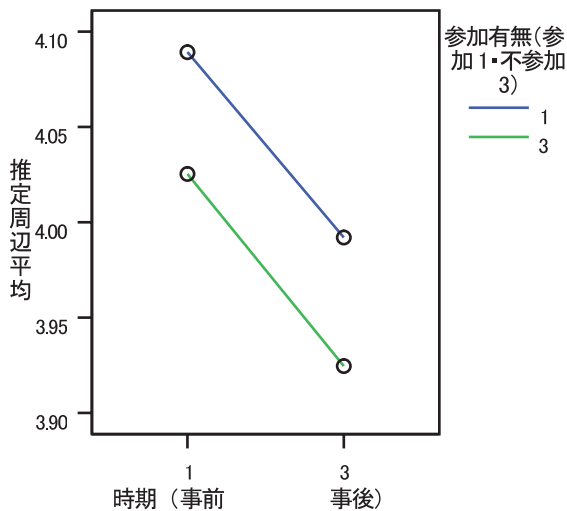


図3 対人的感受性尺度 解釈平均

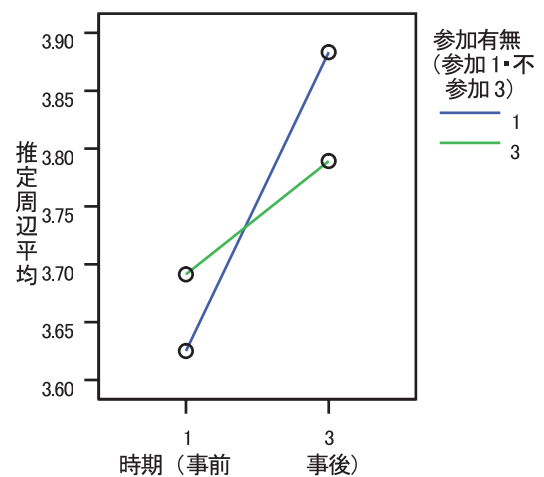


図4 対人関係過敏性尺度 対人不安・分離不安平均

抱いていると分かる」と私はそのことを意識してしまう」の項目で、有意に得点が高くなり、「人が何かを怒っていても私の気分は害されない」の項目で、有意に得点が低くなっていた。「解釈」因子では、交互作用、参加・不参加、事前・事後いずれにおいても有意な差はみられなかった。「符号化」「非影響性」「解釈」因子の平均点の推移を図に示した(図1, 2, 3)。

次に、対人関係過敏性尺度の「対人不安・分離不安」因子では、交互作用、参加・不参加、事前・事後いずれにおいても有意な差はみられなかった。「対人承認」因子では、同様に、交互作用、参加・不参加、事前・事後いずれにおいても有意な差はみられなかった。「脆弱な内的自己」因子でも、同様に、交互作用、参加・不参加、事前・事後いずれにおいても有意な差はみられなかった。「臆病さ」因子では、交互作用と事前・事後には有意な差は見られなかったが、参加・不参加において有意な差がみられた ($F=5.13, p<.05$)。それぞれの因子の平均点の推移を図4, 5, 6, 7に示した。

最後に、ノンバーバル感受性においても、交互作用、参加・不参加、事前・事後いずれにおいても有意な差はみられなかった(図8)。

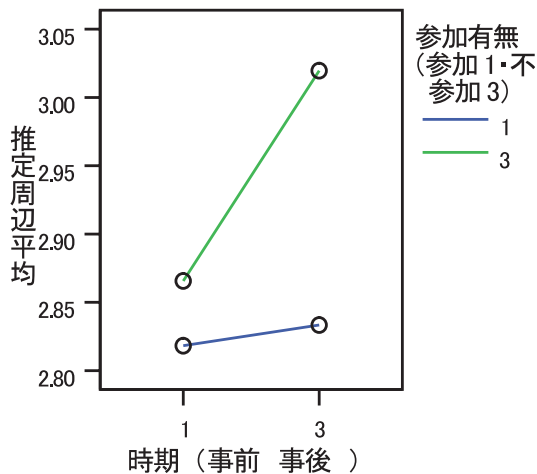


図5 対人関係過敏性尺度 対人認識平均

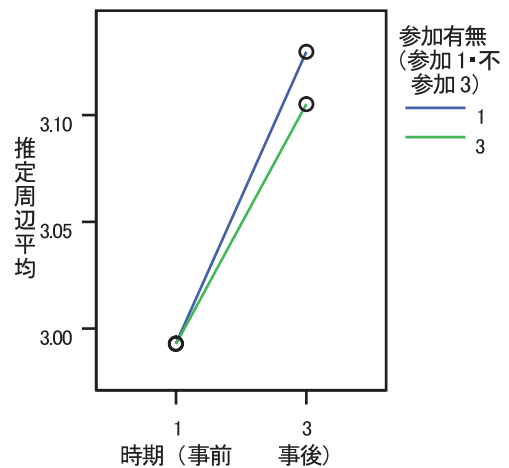


図6 対人関係過敏性尺度 脆弱な内的自己平均

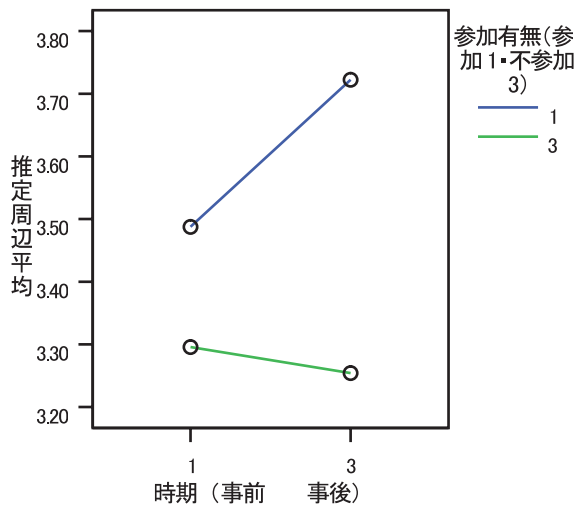


図7 対人関係過敏性尺度 臆病さ因子平均

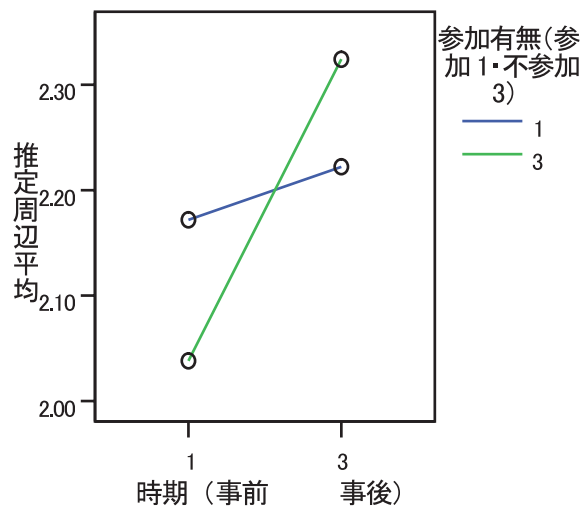


図8 ノンバーバル感受性平均

IV 考察

本研究では、臨床心理士を目指している大学院生の感受性訓練の一環として乳幼児との情動調律を中心とした実習を行った。実習の効果を、3つの質問紙を用いて感受性（対人的感受性，対人関係過敏性，ノンバーバル感受性）の変化について調査した。その結果，対人的感受性の中の非影響性において，特に実習参加者の得点が低くなった。つまり，他者が自分のことを嫌っていたり，軽蔑していたり，怒っていたりしても気にならないという傾向が低くなり，他者が自分に好意を持っていたり，興味をもっていたりすると気になる傾向が高くなった。乳幼児との保育所実習においては，言語で思いを伝えたり，乳幼児の思いを言語で伝えてもらったりすることが難しいため，自分の感受性を働かせてかわらなければならない。そして伝えた，伝わってきた内容が一致していたり，一致していなかったりすることが，その後の乳幼児の態度で推し量るという作業が続く。そのため，「人がどう思おうとなんととも思わない」という態度ではいられなくなったのであろう。また，実習後は，人が自分を軽蔑していると分かったり，気になったり，人が自分に興味を抱いていると分かったりそのことを意識してしまったり，人が何かを怒っていたら，気分が害されたりするようになっていた。これらの乳幼児の興味がどこにあるのか，感情状態はどうなっているのかを気にすることにより体験した感受性の変化だと思われる。

また，保育実習への参加者と不参加者との間に有意な差があったのは，対人感受性の中の符号化であった。これは，自分の感情や思いがその相手か他者にわかってしまうというものであるが，保育実習へ参加したものは，

事前からこの傾向が強い者が多かった。そして実習参加後は、さらにその得点は高くなっていった。それに対して不参加者は、事前からこの傾向は低かった。つまり、実習参加者は、もともと他者に対して自分の感情や思いをわかりやすく伝えようという思いが強い者であったということである。言語だけにたよらず、積極的に感情や思いの符号化を行い、他者に伝えようという意思があるということである。保育所実習は、希望者による参加型の実習であったので、乳幼児との情動調律を行うためには、自らの情動を表現しながら、調律する必要がある、それを好んで行う者、得意な者が参加したのではないかと考えられる。そして、実習参加後は、ますますこの特徴が強くなっていった。

対人的感受性の中の解釈に関しては、参加・不参加の群、事前・事後いずれにも有意な差はみられなかった。得点を見ると参加群・不参加群両群において、事前から平均得点が高く、他者の感情や思いを解釈する傾向は、臨床心理学に興味があり、心理療法家を目指している者にとっては、始めからある程度備わっていた感受性だったのではないかと考えられる。そのため、実習の前後、実習に参加するかどうかでは、差がでなかったと考えられる。

対人関係過敏性の対人不安・分離不安においては、他の下位尺度より平均点が参加・不参加群、事前・事後いずれにおいても高かった。先の解釈と同じように、もともと他者への影響について気に病んだり、心配したり、不安になったりする傾向が心理療法家を目指す院生は強い傾向にあることがわかる。対人は認と脆弱な内的自己においても変化はなかったが、この二つに関してはもともと高かったというものではなかった。人から認めてもらいたいという傾向や人に自分は認められないかもしれない、本当の自分を認めてもらえないかもしれないという側面は、数ヶ月の実習で変化するものではなかった。それに対して、臆病さに関しては、実習参加者のほうが、不参加者より高かった。そして、実習参加者は、実習後に平均点が高くなっていった。他人に腹を立てることが難しかったり、他者を傷つけたり他者から拒否されることを恐れて言わなかったり、他者を怒らせるくらいなら自分でしてしまったりという傾向がもともと強く、他者からの評価に臆病な者、敏感な者が保育所実習を受けたいということになる。一般に他の職種に比べて、幼児教育志望する者は、感情に対して敏感であるという研究報告もあるように（大野・吉村，2006）、乳幼児の実習を希望したものは、他者の感情に敏感であり、実習によってさらに敏感になったと考えられる。

ノンバーバル感受性に関しては、参加・不参加群、事前・事後いずれにおいても違いは見られなかった。もともと高いということもなく、この感受性を高めるためには、乳幼児を対象とした保育実習以外の実習やワークが必要なのであろう。

本研究で乳幼児との情動調律が心理療法家の感受性のある側面については、はぐくむことができるということが明らかとなった。今後、実習の内容や実習生による情動調律の内容などについても検討していく必要がある。また、保育実習による感受性の訓練は、遊戯療法への応用、被虐待児童への対応への応用、子育て支援への応用も可能になる。現在訓練を行っている大学院生の多くは核家族化、少子化の影響から兄弟姉妹数が少なく身近に乳幼児がいなかった者が少なくない。そのため、遊戯療法の事例を担当することになっても子どもと遊ぶこともできない者がいる。また、被虐待児童の増加から乳児院や養護施設において心理療法家が乳幼児にかかわることが増え、その実習ともなりうる。最後に、育児不安を抱える母親も多く、仕事と家庭の両立から、あるいは核家族化から、身近に相談できる対象もいないため、保育所や保健所等での臨床心理士が必要になってきた。これらの現状への対応にも本訓練方法が有効に働くと考える。

今後の課題としては、感受性の変容について尺度以外の方法を使って測定する必要があると思われる。実習参加者のインタビューや実際の乳幼児とのかかわりの行動分析などが考えられる。また、実習の参加者に関しては、希望による参加ではなく感受性訓練が必要な院生、あるいは、全員参加という形をとり、感受性を訓練していく必要がある。最後に、小グループでのディスカッションの内容検討や、実際の乳幼児へのかかわり内容（情動調律がどの程度できているのか）の検討も必要である。

これまでの心理療法家の教育プログラムとして多数存在するものとして、学生同士のロールプレイやグループ活動、自己の振り返りなど大人同士で行うものが多かった。そんな中で、臨床心理学と乳幼児発達心理学の専門家という二つの方向から、学生と乳幼児との実習を行うことによって、得られるものは多いと思われるし、心理療法家自身の個人分析の役割も果たすことが可能になり、より効果的な心理療法が行える臨床心理士を養成することにつながる。社会からの期待に応えるために実証に基づいた実習を行い、その成果（Evidence）を示すことは臨床心理士の説明責任（Accountability）であり、かつ、倫理的な行為でもある。また、この研究結果は、他の多くの臨床心理士養成指定校や専門職大学院においての実習の新たな提案にもなると考える。さらに、様々な

地域の実習現場での大学院生の実習方法が模索されている中で、乳児院や子育て支援の場という新たなフィールドでの臨床心理士の活躍も期待される。

引用文献

- 浅川潔司 (1991) 幼児期の共感性の発達：役割取得水準と共感反応の関係について 日本教育心理学会総会発表論文集, 33, 501.
- Bion, W.R. (1962) *Learning from experience*. Heinemann, London.
- Boyce, P. & Parker, G. (1989) Development of a scale to measure interpersonal sensitivity. *Australian and New Zealand Journal of Psychiatry*, 23, 341–351.
- Convington, C. (1991) Infant observation re-viewed. *Journal of Analytic Psychology*, 36, 63–76.
- 遠藤裕乃 (2000) 逆転移の活用と治療者の自己開示—神経症・境界例・分裂病治療の比較検討を通して— 心理臨床学研究, 18, 487–498.
- Bourke, J.G. & 森平直子 (1992) ラボラトリー・トレーニング (氏原寛編 心理臨床大辞典, 培風館, 323–325).
- 東山紘久 (1986) *カウンセラーへの道 訓練の実際* 創元社.
- 東山紘久 (1994) *箱庭療法の世界* 誠信書房.
- 葛西真記子 (1997) *精神分析的カウンセリングのすすめ方* (中西信男・葛西真記子・松山公一著 精神分析的カウンセリング ナカニシヤ出版)
- 葛西真記子 (2005) 「カウンセリング自己効力感尺度 (Counselor Activity Self-Efficacy Scales)」日本語版作成の試み, 鳴門教育大学研究紀要, 20, 61–70.
- 葛西真記子 (2006) セラピスト訓練における治療同盟, 面接評価, 応答意図に関する実証的研究, 心理臨床学研究, 24, 87–98.
- 葛西真記子・万木歩美 (2006) 共感性と感情覚知の関連性についての研究, 鳴門教育大学研究紀要, 21, 55–67.
- 衣笠隆幸 (1994) タヴィストック・クリニックにおける乳幼児観察の方法と経験 (小此木啓吾・小嶋謙四郎・渡辺久子編 乳幼児精神医学の方法論 岩崎学術出版社, 27–39).
- 広辞苑 (第5版) (2004) 新村出編 岩波書店.
- 益谷真・佐藤直美 (1989) 感情コミュニケーションのコーディング能力—Perceived Coding Ability における伝達経路・社会的望ましさ・性差の検討—*Doshisha Psychological Review*, 36, 26–39.
- 松岡陽子・青柳肇 (1998) インターナル・ワーキング・モデルの発達の変動—感受性との関連から—*ヒューマンサイエンス*, 10, 74–85.
- 三好力 (1999) 対人関係における感受性研究の動向 立教大学心理学研究年報, 41, 67–84.
- 大野雄子・吉村真理子 (2006) 幼児教育志望者の性格タイプ傾向についての考察 (I) 千葉敬愛短期大学紀要, 28, 163–174.
- Racker, H. (1968) *Transference and Countertransference*. The Hogarth Press Ltd., London.
- Sato, T., Narita, T., Hirano, S., Kusunoki, K., Sakado, K., & Uehara, T. (2001) Is interpersonal sensitivity specific to non-melancholic depressions? *Journal of Affective Disorders*, 64, 133–144.
- 澤田瑞也 (1998) *カウンセリングと共感* 世界思想社.
- 澤田瑞也・山口昌澄・鈴木求実子・島津由美・喜納歩美 (2001) 共感性と自己の感情に対する態度との関係(1) 神戸大学発達科学部研究紀要, 9, 1–8.
- 下山晴彦 (2003) *臨床心理演習の理念と方法* (下山晴彦編 臨床心理実習論 誠信書房, 1–36).
- 染矢俊幸・桑原秀樹・坂戸薫・上原徹・坂戸美和子・佐藤哲哉 (1999) *Interpersonal Sensitivity Measure (IPSM)* 日本語版の作成—信頼性と妥当性の検討— *精神科診断学*, 10, 333–341.
- Sullivan, H.S. (1940) Conceptions of modern psychiatry. *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes*, 3, 1–117.
- 鈴木龍 (1994) 乳幼児観察で見えるものは何か? (小此木啓吾・小嶋謙四郎・渡辺久子編 乳幼児精神医学の方法論 岩崎学術出版社, 40–52).
- 鑑幹八郎 (1998) *精神分析的な心理療法の手引き* 誠信書房

- 氏原寛 (2002) カウンセラーは何をするのか — その能動性と受動性 — 創元社
- 和田実 (1991) 対人的有能性に関する研究 — ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成 — 実験社会心理学研究, 31, 49-59.
- 和田実 (1992) ノンバーバルスキルおよびソーシャルスキル尺度の改訂 東京学芸大学紀要 (1 部門), 43, 123-136.
- 渡辺久子 (1994) 乳幼児観察 (小此木啓吾・小嶋謙四郎・渡辺久子編 乳幼児精神医学の方法論 岩崎学術出版社, 53-66).
- 山口義枝 (1999) 乳幼児観察の経験 心理臨床学研究, 17, 34-42.
- 山下一夫 (1994) カウンセリングの知と心 日本評論社.
- Zuckerman, M & Larrance, D. (1979) Individual differences in perceived encoding and decoding abilities. In R. Rosenthal (Ed.), *Skill in Nonverbal Communication: Individual differences*. Cambridge: Oelgeschlager, Gunn & Hain, Publishers. 171-203.

付記 本研究は、平成19年度の独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金の交付を受けて行ったものである。

The Effectiveness of Sensitivity Training Focusing on Emotional Attunement to Infants and Children : For graduate students of clinical psychology

KASAI Makiko*, NAKATSU Ikuko*, SUEUCHI Kayo**
KUME Teiko*, AIHARA Ryozo*, YAMASHITA Kazuo*
and SHIOJI Akiko***

(Key Words : Sensitivity, Attunement, Infant and children, Training)

Abstract

Training institutes, including graduate schools for clinical psychology have been producing qualified and skilled clinical psychologists in society. In order to become good clinical psychologists, the candidates need to have not only knowledge and skills in the subject area but should also have personal characteristics such as sensitivity, empathy, and introspection. In this study a sensitivity training program, which focused on emotional attunement to infants and children, was developed and its effectiveness was investigated using three questionnaires : the perceived coding ability scale, the interpersonal sensitivity measure, and the non-verbal sensitivity scale. Out of 60 graduate students, 18 participated in this program once a week at a nursery school for a period of 5 months. The results showed that the scores of the perceived coding ability scale were significantly increased for students who participated in this program but there was no difference in the scores of the other two scales. The results also showed that there were significant differences between the scores of students who participated in the program and those who did not, with respect to the perceived coding ability and interpersonal sensitivity scales. Students who participated in this program showed higher sensitivity scores even before participating in this program. Therefore, we concluded that the program needs to focus more on emotional attunement and the selection process must change such that all students participate in this program.

*Training and Practice in Clinical Psychology, Naruto University of Education

**Practice of School Clinical Psychology, Naruto University of Education

***Early Childhood Education, Care and Welfare, Naruto University of Education